



審査会でがれきの中の生存者を捜索する犬＝津幡町の県森林公園で

災害時その鼻が頼り

県災害救助犬審査会が三十一日、津幡町の県森林公園で

開かれた。東日本大震災を踏まえて例年以上に緊張感が漂う中、がれきの中から生存者を捜す実技試験などを行い、十頭を県の災害救助犬(期間一年)に委嘱した。

ラブラドルレトリバーやシェパードなど県内の愛犬家十七人の二十頭が参加。リードなしではしごを渡ったり、トンネルをくぐる服従審査や、持ち時間五分でがれきの中から生存者を捜し出す模擬捜索などに挑んだ。

救助犬の委嘱は、阪神大震災

県救助犬審査会 10頭を委嘱

災害を教訓に一九九七年から始まった。

県救助犬協会連合会によると、これまで県要請による公式出動はないが、二〇〇七年の能登半島地震や新潟県中越沖地震にボランティアで出動。東日本大震災でも二回計十三頭が遺体捜索などに加わり、例年三月の審査会が二カ月遅れた。

松平博之会長は「救助犬のレベルアップを図りたい」と述べるとともに、被災地での経験を基に手話通訳など他の団体との連携に意欲を示した。

(山森保)